
敵機来襲

秋月 涼

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

敵機来襲

【Nコード】

N1152E

【作者名】

秋月 涼

【あらすじ】

【短編読切作品】灼熱の太陽が容赦なく照りつけ、真夏の空はどこまでも白く輝いていた。あの日の暑さを、乾いた空気を、今でも良く憶えている。

灼熱の太陽が容赦なく照りつけ、真夏の空はどこまでも白く輝いていた。

あの日の暑さを、乾いた空気を、今でも良く憶えている。

突如、静寂を破って、日焼けした戦友が鋭く叫んだ。
「いたぞ！」

強い逆光の中に、敵の姿がくつきりと浮かび上がっていた。俺たち防衛部隊には即刻、鋭い緊張感が走った。隊員は迅速に配置につき、臨戦態勢を整えた。

警戒の網を張り巡らしているのに、やつらは僅かな隙を突いて俺たちの領域に侵入してくる。いったん近くに身を潜めて機会をうかがい、夜更けに総攻撃を仕掛けてくる魂胆だ。

飛び散る赤　血塗られた戦いの記憶が、まざまざと蘇る。
季節はめぐり、再び暑い夏がやってきたのだ。

右へ、左へ、すぐに右へ。集中力を極限まで高め、両目を見開いて敵の姿を追った。張り詰めた空気の中で、自分の心臓がバクバク鳴っているのが分かった。

ここで倒さなければ、いずれ俺たちがやられるんだ。

相手も馬鹿じゃない。急旋回、きりもみ飛行などを繰り返しながら上昇し、何とかして対空砲の射程範囲から逃れようとする。

「逃がすか！」

素早く照準を合わせ、俺は猛然と攻撃を開始した。虚空に一発、二発と、立て続けに破裂音が響き渡った。無我夢中で、がむしゃらに、俺は戦った。

パシュン、パシュン、パシュン。

狙いを定める時間すら惜しくて、とにかく続けざまに対空砲を使

用した。これだけやれば、一発くらいは当たり、仕留められると思
っていた。防衛部隊の武器は、飛距離には難があるけれども威力は
抜群で、当たりさえすれば敵は墜ちる。

「落ち着いて攻めるんだ！」

戦友の忠告も耳に入らず、俺は戦いにのめり込んでいた。後から
考えれば、その時の俺は自軍の武器と自分の能力を過信し、敵を見
くびっていたのだろう。

結局、渾身の迎撃は全くの徒労に終わってしまった。相手は見事
なほど敏捷な動きで俺の連続攻撃を回避し、防衛部隊の手の届かな
い場所へ無事に撤退した。

その上、激しい戦闘の末に、いつしか俺は敵の姿を見失っていた。
本当にあつという間の出来事で、気がついたら全てが手遅れになっ
ていた。

愕然と立ちつくした俺は、もはや追撃を断念するほかなかった。
額にはいつの間にか汗の粒が幾つも浮かび、こめかみを伝って両目
に染みだ。

戦いの帰趨を決める重大な緒戦で、俺は手痛い敗北を喫してしま
った。責任感がずっしりと心にのし掛かってきた。へまをした自分
への怒りが膨らみ、情けなさや悔しさと恥ずかしさが交錯し、沸
騰していた。

それらの重い感情をいなくなった敵にぶつけ、八つ当たりするこ
とで、俺は何とか自己嫌悪に耐えようとしていたのかも知れない。

「野郎っ！ 出てこい、この根性無しが。俺と戦え！」

俺は吼えた。吼えることしかできなかった。そして乾いた唇を
きつく噛んだ。

「慌てるな。じっとしていれば、絶対にあいつから来る」
戦友の冷静な言葉で、はっと我に返った。

度重なる敵の夜襲に、友軍は何度も悩まされていた。ここで逃がしたら。

戦いのさなか、俺は知らず知らずのうちに焦っていたのだろう。鼓動は速まり、身体も火照って熱くなっていた。

「……畜生っ」

考えてみれば、きちんとした作戦を遂行したわけではなく、そもそも俺が独断で実行した無理のある攻撃だった。恨み言を呟きながらも、いったん引き下がり、体勢を立て直すことを選んだ。

「あいつ、どこへ行った？」

「あそこだ。待って、おびき寄せて、一気に叩こう」

戦友が少し遠くを指差した。彼は相手の撤退経路を把握していた。

示された方を凝視すると、憎らしい敵は確かにその付近を飛んでいた。遥かに高い場所で、今はまだ手を出せない。俺たちの対空砲では届かないのだ。

折りしも通り過ぎた爽やかな空気の流れが、身体だけにとどまらず、心までも冷やしてくれた。軽く溜め息をついて、肩の力を抜いてみる。

「ふう。あいつめ、命拾いしたな」

苦々しい思いで、ゆがんだ笑みを浮かべた俺は、遠ざかる敵の姿を睨みつけた。そして次こそは絶対に仕留めてやると、気持ちを前向きに切り替えるのだった。

太陽は燦々と、痛いほどの輝きで照りつけていた。

敵はしばらく警戒をし、遠くの方をさまよっていた。俺たちはやつた姿を見失わないように偵察を続けた。一時的に、戦闘は表面上の小康状態となった。

息をひそめて、俺たちは敵が近づいて来るのを待った。早く動き

たいが、それよりも確実に勝ちたい思いが強くて、じつと我慢する。領域の平和を守るため、これ以上の失敗は許されない。唾を飲み込んで、こぶしに力を込めた。同じ過ちは繰り返さない。今度は相手に照準を合わせ、一発で撃ち落としてやるぞ。

しばらくすると、状況に変化があった。

抵抗が終わったと見たのだろう。やつは性懲りもなく、じわじわとこちらへ向かって移動を始めた。戦友が予想した通りの展開に、俺は少し身乗り出した。

罨にかかったな、飛んで火に入る夏の虫とはまさにお前のことだ。これを貴様の最後のフライトにしてやる。あつという間に血が燃えたぎり、気持ちは高ぶっていたけれど、俺は何とか自らを律し、対空砲を準備して敵の動きを注視した。

そのすぐ後だった、耳につく飛行の音が急激に近づいてきたのは敵をギリギリまで欺くため、地上で迎え撃つ防衛部隊はいまだに息を潜めて微動だにせず、まずは首と目だけを動かして相手の飛行経路を分析した。

俺は指先に力を込めた。いつの間にか、掌にはじつとりと汗をかいていた。

あと少しで対空砲の射程範囲になると思った時、敵は異常を察知したのか、少し上に逸れた。こうなったら一喜一憂せず、辛抱強く機会を待つしかない。戦友も警戒しつつ、隙あらば自分から攻撃を仕掛けようと、俺のすぐ横で戦いのゆくえを見守っている。降り注ぐ陽の光は相変わらず強く、果てしない大空は明るかった。

まもなく敵は再び下降してくる。忌まわしい飛行音が迫り来る。類い希な機動力と冷徹な判断力を併せ持つ敵は、何度か急旋回を繰り返しながら、こちらに向かって降りてくる。敵は俺たちを狙い、俺たちは敵を狙っている。渴いた喉が張り付く。息もできないほど

の緊迫感の中で、真夏の太陽がきらりと輝く。

敵の姿を逃さないように集中力を限界まで高め、対空砲が確実に命中する距離かどうかを判断し続ける。

もうちよつと　そのまま来い。

今だ。

瞬時に手を伸ばす。

対空砲が大地を発つ。

相手の動きがゆっくりに見える。

俺の武器が近付く。

敵は速度を増す。

互いの執念が燃える。

追尾する。

振り切ろうとする敵。

慌てて急旋回。

予想の範疇だ。

さらに迫る。

接近する。

追いつく。

肉薄。

ゼロ。

その刹那、付近を圧倒する強烈な破裂音が響き渡った！

パシユッ！

攻撃の時に発生した鋭い風が、だんだんと収束していった。
その後は不気味なほどに空虚な静寂が支配した。

とりあえず、やつの目障りな姿は見えないし、耳障りな音は聞こえなくなった。俺の迎撃は敵を捉えた　ように思えた。作戦は上手く行ったのだろうか。

心臓は戦いの余韻を残し、いまだに激しく叫んでいたが、判断力の方は不思議と落ち着きを取り戻し始めていた。やつの残骸を発見するまでは糠喜びできないけれど、いやが上にも期待感が高まっただけ。

戦友が半信半疑の様子で訊ねた。

「どうだ？」

「探してみるよ」

はやる気持ちを抑えつつ、身を乗り出して眼下の世界を確認した。程なくして、俺の両目はある一点に吸い込まれていった。

「あつ」

あいつだ　。

ああ、間違いない。間違うはずがない。

撃墜されて潰れた敵の姿が、そこにあった。

「やった、勝った！　大勝利だ！」

思わずガッツポーズを取った。激戦の後遺症で掌がひどく痛んだが、それが大して気にならないほど、俺はほっとしていた。長い重圧から解放されたからだ。

「やったな」

戦友である兄がねぎらってくれた。しかし、そう言った彼の表情は複雑だった。

彼の顔を見ているうちに、勝ち戦の高揚感が不思議と冷めていった。

もはや満面の笑みは浮かべられない。俺は考えた。いったい何故、血で血を洗い、命を賭してまで争わなければならないのだろう。これが互いの宿命と、頭では理解しているつもりだけれど　戦いの後

にはいつも、黒ずんだ迷いと虚しさだが、心の奥底をよぎる。俺は忘れていた疲れが急激にのしかかってくるのを感じた。

ともあれ一つの戦いが終わった。当面、しつこい夜襲は落ち着くだろう。

だが、真夏の死闘は始まったばかりだ。敵の数は多く、再び領域の平和を脅かすだろう。決して勲章の貰えることのない、辛く厳しい戦いは続いてゆくんだ。

つぶれて血のにじんだ、ヤブ蚊の死骸。

それを柔らかな白いティッシュでくるみながら、俺は思った。

蚊取り線香、買おうかなあ。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1152e/>

敵機来襲

2010年10月8日15時07分発行